

高等学校芸術科(工芸)におけるデザインの位置 —学習指導要領および検定教科書の変遷に関する分析を通して—

竹内 晋平 奈良教育大学美術教育講座(美術教育学)

Design in High School Art (Crafts Production): Analyzing the Changes of the National Curriculum Guidelines and Authorized Textbooks

Shimpei TAKEUCHI

(Department of Fine Arts Education, Nara University of Education)

Abstract

This study aims to clarify contemporary aspects of high school art (crafts production) by analyzing the position of design. To investigate the changes of the National Curriculum Guidelines, contents of the guidelines that have been passed through revisions seven times were compared with each other. As a result of the comparison about the guidelines, it was revealed that the description about the design in the contents have gradually decreased. Then, authorized textbooks that had been published during the same timeframe were collected and analyzed. The textbooks are classified into three periods. I was able to categorize all teaching material into four types. As a result of the textbook analysis, it was revealed that the teaching materials published about design have gradually decreased. However, the teaching materials about traditional crafts, crafts production, and craft theory have increased. In conclusion, high school art (crafts production) is gradually increasing the independence of the educational subject, it is still important that such efforts.

キーワード：高等学校芸術科(工芸)、デザイン、検定
済工芸教科書

Key Words: High School Art (Crafts Production),
Design, Authorized Textbooks of
Crafts Production

1. 序

1.1. 研究の背景・目的

高等学校に「芸術科」が位置付けられたのは、昭和31年度の学習指導要領改訂の時である。これに先行して昭和26年度に示されていた試案では、「芸能科工作教育課程」という名称であった。昭和31年度改訂以降、高等学校芸術科は音楽・美術・工芸・書道という4科目による編成となった。これは今日まで続いているが、すでに半世紀以上が経過している。本研究で着目する高等学校芸術科(工芸)は、時代の変化とともに、その目的や内容にも明らかな変容がみられる科目であるといえる。

宮協理は工芸教育をめぐる、工芸という語そのものも多義性とともに、民衆的工芸(フォーク・アート)の意義について指摘している⁽¹⁾。その一方で高等学校芸術科(工芸)では、この半世紀の間にデザインの概念

を色濃く扱ってきた経緯がある。本研究においては工芸がもつ多義性、つまり民衆的、量産的、そして伝統的な側面等を踏まえながら、高等学校芸術科(工芸)においてデザインの位置付けがどのように変容してきたのかを検討することを通して、工芸教育の現代的様相を明らかにすることを目的としている。なお、本稿においては次節以降、高等学校芸術科(工芸)のことを「科目・工芸」、高等学校芸術科(美術)のことを「科目・美術」とそれぞれ記述する。

1.2. 高等学校芸術科(工芸)に関する先行研究の動向

高等学校における科目・工芸を扱った研究は多く、様々な観点からすでに複数の報告されている。その中でも本稿が研究対象とする、科目・工芸の変遷や経緯等について包括的に論じたものについて述べておきたい。

山田一美による「高等学校学習指導要領芸術科編 昭

和31年度改訂版 美術・工芸に関する一考察」⁽²⁾では、科目・工芸の成立に関わる詳細な経緯についての考察がなされている。特に高等学校芸術科の形成過程において、民間美術教育団体が与えた影響や、学習指導要領改訂に至るまでの議論について詳細に論じられている点が特筆される。また、本稿が問題としている科目・工芸におけるデザインの扱いに関しては、「これは、明らかに当時のデザインブームと深くかかわっている」⁽³⁾と指摘している。科目・工芸および科目・美術が昭和31年度以降、デザインをどのように扱ったのかについての調査を行う上で、山田による論文から得られる示唆は重要であるといえる。

片野一の「高等学校の工芸科目の内容と現状についての考察」⁽⁴⁾では、芸能科時代の昭和22・26年度版から芸術科が成立した昭和31年度版を経て、平成元年版に至るまでの学習指導要領についての検討が行われている。同論文では、科目・工芸と科目・美術とを対比させて学習指導要領の変遷が論じられており、特に昭和35年度改訂に関しては、それまで科目・工芸が扱っていた領域「デザイン」が科目・美術において扱われることになったことについて指摘している（科目・工芸においては「デザインの基礎練習」「デザインの製作」に領域名を変更）。その後の昭和53年度版の「デザインの基礎」に関する項目が平成元年版の中項目から消えていることについてふれながら⁽⁵⁾、経年とともに科目・工芸の性格に変化がみられることについて指摘している。このような科目・工芸に関する詳細な縦覧は、本研究を推進する上で大変意義深い。

その他、科目・工芸を扱った論文としては、福田隆真・佐々木幸が平成元年度版・学習指導要領に基づいた教材事例等について論じた「高等学校工芸の教材の構造化についての考察」⁽⁶⁾がある。同論文では、昭和53年度版では科目・美術に対して補完的な傾向であったデザインの扱いが、平成元年度改訂では「工芸のデザイン」として工芸の意識が強化されたことについて指摘している⁽⁷⁾。この点は片野による指摘とも符合するものである。

以上の先行研究における指摘を踏まえ、本稿においては次の手続きによって科目・工芸におけるデザインの概念の変容についての検討を行うこととする。

- ・ 科目・工芸が成立した昭和31年度版から現行の平成20年度版までを対象として学習指導要領の「内容」に含まれる語句を概観し、その変遷に関する検討を行う。
- ・ 上記検討によって得られた時期区分に基づき、検定済工芸教科書の題材の変遷について検討を行う。

2. 高等学校学習指導要領芸術科編（工芸）の変遷

本章では、昭和31年度以降に改訂された学習指導要領の変遷についての検討を行う。同年度を含めると、現在までに計7回の改訂が行われていることになる（昭和31年度版、同35年度版、同45年度版、同53年度版、平成元年度版、同10年度版、同20年度版）。前章でふれた片野の先行研究では、科目・工芸は芸能科時代を含めて3つの時期に区分できるという。その区分は、第一：昭和22・26年改訂、第二：昭和30・35年改訂、第三：昭和45・53・平成元年改訂、とされている⁽⁸⁾。本稿においては芸能科時代を研究対象としないこと、片野の論文が発表されて以降、さらに平成10・20年版の学習指導要領が告示されていること等を踏まえ、本章においては独自の区分を構成したいと考える。

表1は、計7回の改訂が行われた学習指導要領の「内容」における領域および中項目について抜粋したものである（領域名には引用者が下線を付し、それに対応させて右側に中項目を記載した。小項目や付帯的な説明は省略している）。デザインの示され方に着目して表1を概観すると、下記4期の区分が形成される。

- I 期： デザインが領域名として位置づいた時期
→ 昭和31年度
- II 期： デザインが領域名に含まれた時期
→ 昭和35・45年度
- III 期： デザインが領域名から消え、中項目において記述された時期
→ 昭和53年度
- IV 期： デザインが領域名から消え、中項目以下において工芸の視点から記述された時期。または全く記述さなかった時期
→ 平成元・10・20年度

前述のように片野、福田・佐々木によって昭和53年度版と平成元年度版との相違はすでに指摘されている。本稿でもこの点を踏まえ、上記のような4区分を作成した。

この時期区分ごとに、デザインが科目・工芸においてどのような性格を帯びていたのかについて整理することを試みる。I 期では、デザインが領域名として位置づいていることからわかるように、科目・工芸においてデザインそのものが学習内容として扱われていた時期であるといえる。その要因として、この時期は科目・美術にデザインの領域が成立していなかったことがあげられる。次にII 期では、科目・美術に領域「デザイン」が位置付けられたために（昭和35年度）、科目・工芸では比較的、応用デザイン的な傾向が目立つ。小項目の記述には「量産」「構造」「模型製作」等が見られる。またIII 期

表 1 高等学校学習指導要領芸術編（工芸）に示された「内容」の変遷⁽⁹⁾

I 期	昭和31年度	<p>工芸1年次</p> <p><u>デザイン</u> 基礎学習／デザイン実習／鑑賞・批判</p> <p><u>製作</u> 製作実習／理解／使用鑑賞</p> <p><u>工芸概論</u> 工芸の特質／工芸におけるデザイン・材料・技術／現代の工芸</p>
		<p>工芸2年次</p> <p><u>デザイン</u> 基礎学習／デザイン実習／鑑賞・批判</p> <p><u>製作</u> 製作実習／理解／使用鑑賞</p> <p><u>工芸概論</u> 工芸の変遷／現代工芸の動向</p>
		<p>工芸3年次</p> <p><u>デザイン</u> 基礎学習／デザイン実習／鑑賞・批判</p> <p><u>製作</u> 製作実習／理解／使用鑑賞</p> <p><u>工芸概論</u> 工芸の様式／現代工芸／工芸政策</p>
II 期	昭和35年度	<p>工芸 I</p> <p>A <u>デザインの基礎練習</u> (1)美的構成／(2)材料と構造／(3)表示</p> <p>B <u>デザインと製作</u> (1)視覚的效果を主とするもの／(2)機能的効果を主とするもの／(3)上記(1)および(2)による製作に際しては、次の事項を指導する(引用者注：小項目「次の事項」を省略)</p> <p>C <u>批判・鑑賞</u> (1)批判・鑑賞の対象／(2)上記(1)の扱いにおいては、次の観点から指導する(引用者注：小項目「次の観点」を省略)</p>
		<p>工芸 II</p> <p>A <u>デザインの基礎練習</u> (1)構成／(2)図法／(3)表示</p> <p>B <u>デザインと製作</u> (1)手工芸品／(2)宣伝、展示など／(3)器具、機械など／(4)家具、建造物など／(5)上記(1)、(2)、(3)および(4)による製作に際しては、次の事項を指導する(引用者注：小項目「次の事項」を省略)</p> <p>C <u>工芸理論</u> (1)工芸の特質／(2)工芸の動向／(3)現代の工芸</p>
		<p>工芸 I</p> <p>A <u>構成と表示</u> (1)美的構成ができるようにする／(2)合理的構成ができるようにする／(3)図形により形体の表示ができるようにする／(4)上記(1)、(2)および(3)の事項の指導を通して、デザインの基礎的な能力を伸ばす</p> <p>B <u>デザインと製作</u> (1)手工芸品をデザインし製作する／(2)上記(1)の事項の指導を通して、工芸製作の基礎的な能力を伸ばす</p> <p>C <u>鑑賞と理論</u> (1)生活に密着した工芸品を鑑賞する／(2)生活と工芸との関連について、関心をもたせる</p>
III 期	昭和53年度	<p>工芸 I</p> <p>A <u>表現</u> (1)デザインの基礎／(2)使用や装飾のためのデザインと製作</p> <p>B <u>鑑賞</u></p>
		<p>工芸 II</p> <p>A <u>表現</u> (1)使用のためのデザインと製作／(2)装飾のためのデザインと製作</p> <p>B <u>鑑賞</u></p>
		<p>工芸 III</p> <p>A <u>表現</u> (1)使用のためのデザインと製作／(2)装飾のためのデザインと製作／(3)環境のためのデザインと製作</p> <p>B <u>鑑賞</u></p>
IV 期	平成元年度	<p>工芸 I～III</p> <p>A <u>表現</u> (1)工芸のデザイン／(2)工芸の制作</p> <p>B <u>鑑賞</u></p>
	平成10年度	<p>工芸 I～III</p> <p>A <u>表現</u> (1)工芸制作／(2)プロダクト制作</p> <p>B <u>鑑賞</u></p>
	平成20年度	<p>工芸 I～III</p> <p>A <u>表現</u> (1)身近な生活と工芸／(2)社会と工芸</p> <p>B <u>鑑賞</u></p>

においては、前出の福田・佐々木⁽¹⁰⁾が指摘するように科目・美術を補完する意味合いでデザインの基礎を科目・工芸で扱っていた時期であると考えられる。そして平成になってからのⅣ期においては、科目・工芸の独立性が模索された時期であると考えられる。平成元年度版には、中項目にデザインの記述がみられるが「工芸のデザイン」とされていて、工芸制作の手段としてのデザインという性格であることがわかる。平成10年度版では、中項目でのデザインについての記述が消え、さらに工芸的視点が色濃くなる。そして平成20年度版では、小項目や付帯的な説明においてもデザインの語が全く記述されなくなった。

このようにⅠ～Ⅳ期を概観すると、科目・工芸が成立した昭和31年度には筆頭の領域であった「デザイン」の学習内容としての性格は徐々に薄れ、半世紀後の平成20年度になると、学習指導要領における記述の上では完全に消滅している。このような変容は他教科・他科目等と比較しても特異な例であるといえよう。

これまでにふれたデザインについての概念の他、各期の間にみられる相違について列記する。

- ・「伝統」の記述が加わったのはⅡ期からである。Ⅲ期以降の中項目がかなり整理されたために記述されなくなるが、Ⅳ期の小項目以下には比較的多く、「伝統」についての記述がみられる。
- ・「手工芸品」「器具」「家具」「建造物」「装飾」「環境」等、具体的分野・対象に関する記述がみられるのはⅡ・Ⅲ期である。Ⅳ期では、具体的に扱う分野・対象についての記述が少なくなる。
- ・Ⅰ～Ⅲ期では「製作」という記述がなされていたが、Ⅳ期では「制作」に変更されている。

これらの変容もⅡ期以降、科目・美術に対して補完的な位置づけであった科目・工芸が独立性を模索しながら改善を重ねた結果であると考えられる。これまでの議論を通して、この半世紀の科目・工芸の潮流として、「量産性とデザイン性」の重視から「創造性と伝統性」の重視へと緩やかに移行したことを読み取ることができるのではないだろうか。次章では検定済工芸教科書の分析を通して、題材にみられる傾向を確認することとする。

3. 高等学校芸術科（工芸）検定済教科書の変遷

3.1. 教科書調査の概要と方法

高等学校学習指導要領芸術科編（工芸）では計7回の改訂を経ており、科目・工芸の内容に明確な変容がみられた。本章では各期の検定済教科書における題材に、どのような特徴が現れるのかについて明らかにしていき

たい。各期の割合を比較するため、教科書に掲載されたすべての題材を下記4つの題材種に分類することとした。

「デザインの知識と技法」

グラフィック、プロダクト、色彩、構成、文字、マーク、図法、自然美・人工美、等

「工芸製作（制作）の知識と技法」

木工、金工、陶芸、漆工、染織、七宝、プラスチック加工、建築、環境、都市設計、材料、構造、等

「伝統工芸」

日本各地の伝統工芸、諸外国の伝統工芸、伝統工芸に関する鑑賞、等

「工芸理論と工芸史」

工芸概論、工芸史、デザイン史、等

題材種の分類に際しては、教科書を実際に閲覧して図版やキャプション、添えられた文章等に基づいて総合的な判断を行った。なお、計数にあたっては目次の記述も考慮したが題材数を基準としたため、各教科書のページ数とは不一致の場合もある。そして、1つの題材に複数の題材種の要素が含まれるものについては、より中心的に扱われていると考えられる題材種に分類した。

3.2. 教科書調査の対象

- ・Ⅱ期に対応する教科書

小池岩太郎・高橋正人『デザイン（1年次用）』日本文教出版（以下「日文」と記載）、昭和34年）、小池岩太郎『デザイン（1年次用）』日文（昭和37年、図1）、小池岩太郎『デザイン（工芸Ⅰ）』日文（昭和43年）、小池岩太郎『デザイン（工芸Ⅰ）』日文（昭和45年）、小池岩太郎『高等学校 工芸Ⅰ』日文（昭和48年、図2）、小池岩太郎『高等学校 工芸Ⅱ』日文（昭和50年）、小池岩太郎『高等学校 工芸Ⅱ』日文（昭和51年）、以上全7冊・全278題材

- ・Ⅲ期に対応する教科書

小池岩太郎『高等学校 工芸Ⅰ』日文（昭和56年）、小池岩太郎『高等学校 工芸Ⅱ』日文（昭和57年）、小池岩太郎『高等学校 工芸Ⅰ』日文（昭和60年、図3）、小池岩太郎『高等学校 工芸Ⅱ』日文（昭和61年）、小池岩太郎監 小松敏明・四宮義四郎著『高等学校 工芸Ⅰ』日文（昭和63年）、小池岩太郎監 小松敏明・四宮義四郎著『高等学校 工芸Ⅱ』日文（昭和63年）、以上全6冊・全192題材

- ・Ⅳ期に対応する教科書

小池岩太郎監 小松敏明・四宮義四郎著『高等学校 工芸Ⅰ』日文（平成3年）、小池岩太郎監 小松敏明・四宮義四郎著『高等学校 工芸Ⅱ』日文（平成4年）、小池岩太郎監 小松敏明・四宮義四郎著『高等学校 工

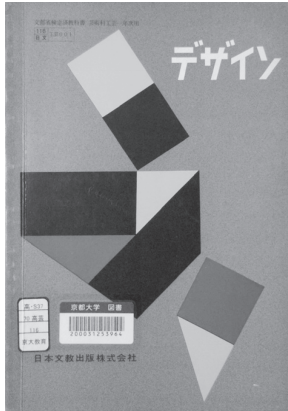


図1 『デザイン』 1年次
(Ⅱ期・昭和37年)



図2 『高等学校 工芸Ⅰ』
(Ⅱ期・昭和48年)



図3 『高等学校 工芸Ⅰ』
(Ⅲ期・昭和60年)

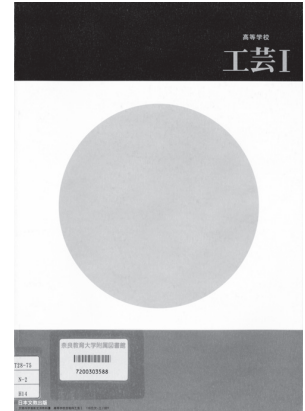
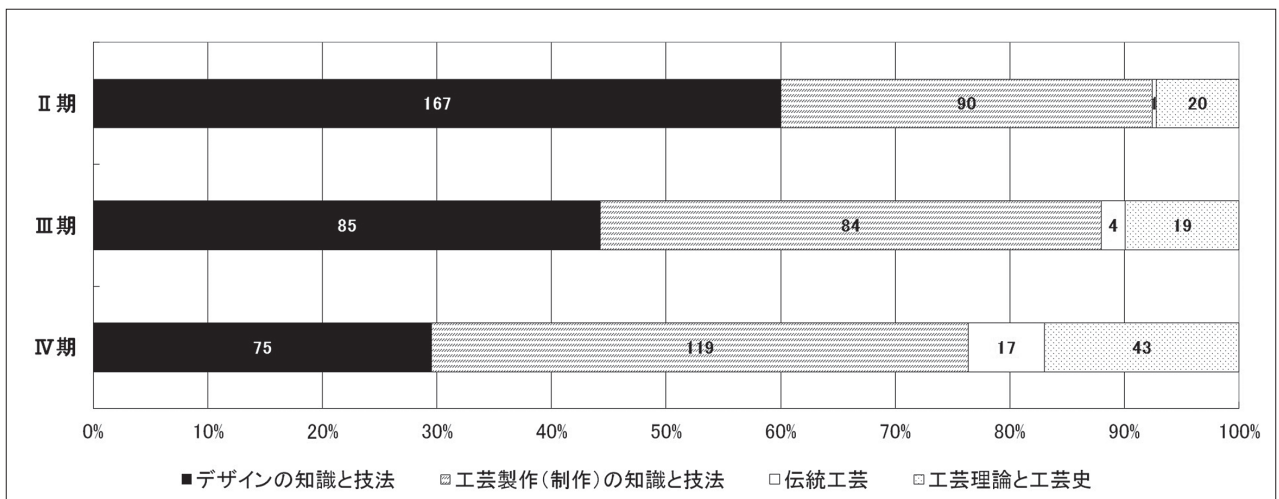


図4 『高等学校 工芸Ⅰ』
(Ⅳ期・平成15年)



※ 各期の題材総数はⅡ期：278，Ⅲ期：192，Ⅳ期：254であり，各グラフ内の数値は題材実数を示している

図5 Ⅱ～Ⅳ期の検定済教科書における題材種の内訳

芸Ⅰ』日文（平成6年），小松敏明・四宮義四郎『高等学校 工芸Ⅱ』日文（平成7年），小松敏明・四宮義四郎『高等学校 工芸Ⅰ』日文（平成10年），小松敏明・四宮義四郎『高等学校 工芸Ⅱ』日文（平成11年），小松敏明・川野辺洋『高等学校 工芸Ⅰ』日文（平成15年，図4），小松敏明・川野辺洋『高等学校 工芸Ⅱ』日文（平成16年），小松敏明監 長濱雅彦・川野辺洋著『高等学校 工芸Ⅰ』日文（平成25年），小松敏明監 長濱雅彦・川野辺洋著『高等学校 工芸Ⅱ』日文（平成26年），以上全10冊・全254題材

※ Ⅰ期は，芸能科工作で使用された教科書を継続使用した時期であるため，今回調査の対象から除外した。

3.3. 教科書調査の結果と考察

図5は，検定済工芸教科書（Ⅱ～Ⅳ期）に掲載された全題材を4種に分類してそれぞれの割合を示したグラフである（題材総数が各期で異なるため，全数を100%と

して各グラフの長さによって題材種の割合を表示した。各期に「工芸Ⅰ」および「工芸Ⅱ」をそれぞれ合算している）。本節ではⅡ～Ⅳ期を比較し，それぞれの題材種にみられる傾向について論じることとする。

「デザインの知識と技法」に該当する題材は，この半世紀で減少の一途を辿っていることがわかる。Ⅱ期においては「デザインの知識と技法」に該当する題材が全題材の約60%を占めていた。Ⅱ期のうち前半は，『デザイン』が書名となった教科書（図1）が使用されていたことから，この題材種が科目・工芸の中心的存在であったことがうかがえる。しかし，Ⅲ期において「デザインの知識と技法」に該当する題材は全体の半数を割り込み，Ⅳ期では30%にも満たない割合となっている。この傾向は，前章において述べたように，学習指導要領の領域名からデザインが消え（Ⅲ期），さらに小項目にも記述されなくなった（Ⅳ期）ことと符合する。ただし，この半世紀以上にわたる教科書を縦覧すると，例えば色彩の体

系(色相環など)や美の秩序(律動・均衡など)の題材は、各期を通して継続的に採用されていることがわかる。そして、Ⅳ期に含まれる現在も、「デザインの知識と技法」に該当する題材が一定の割合で教科書に掲載されているのは、「デザインを学ぶため」というよりは、「工芸制作の基礎的能力を習得するため」という意図に近いと解釈される。

次に「工芸製作(制作)の知識と技法」に該当する題材は、Ⅱ期の約30%からⅣ期の約50%へと、緩やかに増加した。特にⅢ期の教科書を概観すると、木工や金工、そして陶芸以外にも幅広い工芸技法を掲載しているとの印象を受ける。それは例えば、七宝、皮革工芸、籐工芸、ガラス工芸、プラスチック成型などである。このような多種多様な内容に対応する設備の問題、指導者の人材的条件の問題については、前出の福田・佐々木⁽¹¹⁾によって指摘されている。

そして「伝統工芸」については、各期ともその割合は高くないが、Ⅳ期になってかなり増加した題材種である。学習指導要領の変遷からもⅠ・Ⅱ期では、工芸における現代性が追究されたように読み取ることができるが、Ⅲ・Ⅳ期では文化遺産としての意義や伝統性に関する特色を重視していることがうかがえる。特に直近の平成20年度の学習指導要領改訂に先立ち、中央教育審議会答申に示された「美術文化の継承と創造への関心を高めるために、作品などのよさや美しさを主体的に味わう活動や、我が国の美術や文化に関する指導を一層充実する」⁽¹²⁾という改善の基本方針からの影響は大きいといえる。

最後に「工芸理論と工芸史」に該当する題材も、この半世紀で倍加している。Ⅰ期の学習指導要領には「工芸概論」が領域として示され、Ⅱ期においても「工芸理論」「鑑賞と理論」等が位置付けられていた。Ⅲ・Ⅳ期の領域名および中項目はかなり整理されたが、小項目には工芸の原理に関する内容が記されている。このような記述が教科書の題材構成にも影響を与えているものと考えられる。

以上、検定済工芸教科書に掲載された各題材種の変遷についての検討を行ってきた。全体的には、この半世紀で工芸教科書は「デザイン題材の減少、他の題材の増加」という、一定かつ緩やかな傾向をもって変化してきたことについて、図5のグラフから読み取ることができる。そして、教科書にみられるⅡ期からⅣ期にかけての変容は、学習指導要領が辿ってきた変遷と概ね重なるものでもあることを確認することができた。

4. 結語

本稿では、高等学校芸術科(工芸)におけるデザイン

の位置付けについて、半世紀の間にどのような変容があったのかという検討を試みた。前章までに述べてきた、学習指導要領および検定済教科書の分析によって得られた知見は、下記4点である。

- ・ 昭和35年度以降、科目・美術にそれまでなかったデザイン領域が成立したため、科目・工芸におけるデザインは、目的的なものから手段的な位置づけへと変容した。
- ・ ただし、工芸教科書への「デザインの知識と技法」に該当する題材の掲載は継続しており、それは工芸制作のために必要な基礎的能力としての側面が強くなった。
- ・ 「伝統工芸」「工芸理論と工芸史」に該当する題材の工芸教科書への掲載は増加傾向であり、平成元年度以降、顕著に増加した。
- ・ 上記3点の変容はこの半世紀の間、緩やかではあるがいずれも一貫した傾向として現れている。

これまでも述べてきたが、昭和31年度版の学習指導要領からは、「工芸を学ぶこと」の多くをデザインが占めていたように感じられる。その後の半世紀は、科目・工芸が科目・美術とは異なる独立性を確立しようとした時代だったのではないだろうか。今後は「工芸を通して獲得することができる能力」についてのさらなる要点整理が望まれる。例えば、本稿において指摘した昨今の「伝統工芸」を重点化については、それを愛好し尊重する心情を育むことにとどまらず、生徒にとってどのような学びにつながるのかについて、詳細に検討することが必要であるといえよう。

工芸教育研究についての今後の展望に関連して筆者は、工芸を通して21世紀の社会に対応するための能力を育成する、という新たな展開について模索している。特に工芸教育がこれまでから重視してきた、生活とものづくりとの関わりや、機能と美との関わり等についての工芸的な視点を活用することによって新たに創出できる教育的意義については、稿を改めて論じる予定である。

註

- (1) 宮脇理「未来からの眺望」『感性による教育』の潮流—教育パラダイムの変換、国土社、1993、pp.183-188
- (2) 山田一美「高等学校学習指導要領芸術科編 昭和31年度改訂版 美術・工芸に関する一考察」、『美術教育学』第12号、1991、pp.295-304
- (3) 同上論文、p.301
- (4) 片野一「高等学校の工芸科目の内容と現状についての考察」、『福島大学教育実践研究紀要』第30号、1996、pp.67-76
- (5) 同上論文、p.74
- (6) 福田隆真・佐々木宰「高等学校工芸の教材の構造化に

- についての考察」,『日本教科教育学会誌』第14巻 第3号, 1990, pp.19-26
- (7) 同上論文, pp.19-20
- (8) 片野, 前掲論文, p.74
- (9) 表1の作成にあたり, 下記のウェブサイトからの引用を行った。
国立教育政策研究所ウェブサイト「学習指導要領データベース」(2014.12.26更新)
(<https://www.nier.go.jp/guideline/>), 2016.05.01取得
- (10) 福田・佐々木, 前掲論文, p.19
- (11) 同上論文, p.20
- (12) 文部科学省ウェブサイト, 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」(2008.1.17更新)

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf), 2016.05.01取得

図版出典

- 図1 小池岩太郎『デザイン(1年次用)』, 日本文教出版, 1962(京都大学教育学部図書室 蔵)
- 図2 小池岩太郎『高等学校 工芸 I』, 日本文教出版, 1973(京都大学教育学部図書室 蔵)
- 図3 小池岩太郎『高等学校 工芸 I』, 日本文教出版, 1985(奈良教育大学図書館 蔵)
- 図4 小松敏明・川野辺洋『高等学校 工芸 I』, 日本文教出版, 2003(奈良教育大学図書館 蔵)

